

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第11号

● 目次 ●

巻頭言：徳田前理事長 国際協力功労者として表彰される	1
萬華鏡：中国の環境問題について	2
Area Report [SIGNAL]：「ロシア」「モンゴル」「中国」「中央アジア」	3.4
研究機関紹介：カルムイク国立大学	4
最近の共同研究会・講演会から	5
センター動向	5
日本館だより	6
センター最近の出版物	6
雑感とお願い	8

徳田前理事長 国際協力功労者として表彰される

本会前理事長 徳田昌則 東北大名誉教授（現 大學評価・学位授与機構教授）は、この7月31日（火）国際協力事業団（JICA）本部において、JICAより“国際協力功労者”として表彰の荣誉に浴されました。

“国際協力功労者表彰”は、JICAが行う国際協力業務に長年にわたって協力し特に功績があったと認められる個人・団体を対象に、昭和50年度から毎年JICAの設立記念日に行われている。

徳田教授は、東北大学選鉱精錬研究所（後 素材工学研究所、現 多元物質科学研究所）において1984年から12年間JICA受入れ選鉱精錬コース研修員を直接指導され、同研究所の受入れ数は現在までに延べ180人までにもなっております。また、メッキ、窯業、電炉等のコースや環境調和型鉱山開発コースの講師も務められました。



電炉コースのガーナの研修員が国費留学生として来日した際には、東北大に受入れ自ら指導教官となり工学博士に育成されるなど、帰国研修員への多大な支援もされました。東北アジア研究センター長に就任された1999年からはモンゴルへのIT支援や公開セミナーの実施に尽力されました。



中国の環境問題について

東北アジア研究センター 助教授 明日香 壽川

中国の環境問題の第一の特徴として、先進諸国では数世代もかかった過程を、わずか一代に圧縮したような工業化（「圧縮型工業化」）が指摘できる。そのような工業化の帰結として、大気や水の汚染、森林喪失、土壌汚染、土壌流出、土壌劣化、ゴミの大量発生、酸性雨、地球温暖化などあるゆる問題を抱えているのが中国である。かつて日本は「公害大国」と言われたが、中国は「環境問題の百貨店」と呼べる。

具体的な健康被害の例を挙げてみよう。日本での戦後の公害問題における原点とも言えるのが水俣病である。実は、中国においても70年代に、水銀中毒事件が吉林省松花江で発生した。そこでは300キロメートルに渡って魚が浮き上がり、日本の水俣病に似た知覚障害を持った患者が発生している。当時、現地を実際に訪れた日本の研究者である原田正純氏によると、水銀汚染の原因となった工場の排出浄化装置は、日本の水俣病の加害者であるチッソ工場における（不十分な）浄化装置と全く同じものであった。すなわち、水俣の悲劇が20年後に中国で再び繰り返されたのである。

現在、貴州省の貴陽市において新たな水銀汚染問題が発生しており、日本政府の政府開発援助（ODA）による支援が行われている。水俣病のような公害病は、病気の認定基準によって患者数が大きく変わり、社会へのインパクトも大きく変わる。確かに、現代の公害病は複数の化学物質が関わる複合的な要因によるものなので、認定基準の厳密な設定は難しい（不可能ともいえる）。ただし、中国においても、認定基準を厳しくして患者数をなるべく少なくしようという行政側の思惑は存在しているようである。

中国の環境問題の結果であり、かつ原因にもなっているのが、中国における小さな資源賦存量である。「資源が豊富で地大物博の国、中国」と思われがちである。しかし、一人あたりで見れば、この言葉は誤解以外の何物でもない。この資源制約の大きさを、中国で生きる人々は十分に認識している。1994年に筆者が中国で行った社会意識調査では、「中国は土地が広く、物産が豊富であるので環境問題は存在しないと思う」と答えたのは、全体のわずか1.8%であった。

食糧を生み出すという意味では、中国で一番重要な自然資源ともいえるのが耕地だろう。しかるに、高原あるいは1000メートル以上の山地が国土の半分を占める地

形条件、数千年にわたる農耕による収奪、降雨による土壌流失、そして最近の工業化を中心とした開発などによって、中国大陸で耕作可能な土地は、現時点で、国民一人あたりでは世界平均の約3分の1、農民一人あたりでは世界平均の約6分の1しかない（日本の約5分の1で、アメリカの約300分の1）。また、灌漑などの設備があるのは全耕地面積の約40%であり、多くの土地では乾燥化、塩化、そして砂漠化が深刻な問題となっている。

森林面積の後退も深刻である。現在、中国における森林被覆率（森林面積が国土面積全体に占める割合）は、わずか十数%（日本の約5分の1）である。中国での国民一人あたりの森林面積も日本の半分（世界平均の約9分の1）であり、地域的にも東北地方と西南地方に偏って分布している。この低い森林被覆率は、「中華文明」

の発展過程の間に人間が伐採していったことが主な原因である。例えば、山西省の森林被覆率は秦代では約50%であったものの、1949年の中華人民共和国成立時にはわずか数%しかなかったとされる。晩唐の詩人である杜牧は、「秦の始皇帝が阿房宮という余りにも巨大な王宮を建てたために、蜀の国（現在の四川省にあたる）のすべての山が禿げ山となった」と詩っている。

しかし、多くの矛盾を抱えながら、時には大きな犠牲を出しながらも、中国が「富国」という目的を持ち続けることは間違いがないと思われる。しかし、その目的の成就是、地球という閉じた生態系に対して大きなインパクトを与える。その理由は至極

単純で、世界人口の5分の1によるエネルギー資源消費の急激な拡大である。「中国の人口抑制政策、いわゆる一人っ子政策に対して人類は感謝しなければいけない」とは人口問題の研究者である若林敬子氏の言だが、私も同感である。中国の経済成長を止めると言うつもりもないし、そのような権利もない。

ただ悲しい現実として、中国が計画出産という多くの悲劇が伴う努力を行っても、人口増加および経済成長がもたらす負の側面の存在を正視する理性と勇気を持つべきだと思う。中国国内のみならず、地球温暖化の促進、越境汚染（大気と海洋・河川）の拡大、エネルギー需要の拡大、木材の輸入拡大、そして食糧需要の拡大という形で地球社会へ少なからぬ影響を与えていかざるをえないのが、中国の「発展」なのである。そして我々が何をなすべきかを国際社会全体で考える必要がある。



中国黄土高原での植林ツアーにて

AREA REPORT

S I G N A L

ロシアから オフィス家具国内生産の復権

経済誌『エクスパート』(2001年9月10日号)では、オフィス家具業界での新興企業家イリヤ・コンドラチェフ氏を紹介している。9月半ばにオフィス家具の生産と販売に従事する企業「フェリックス」の新しい第二工場が稼動する。この企業はロシアで最も現代的な家具製造業である。イリヤ・コンドラチェフ氏は、原則としてロシアにとって新しい家具を生産したいと考えている。第二工場の設立により、ロシア市場でイタリア製、ドイツ製、スペイン製、その他外国の家具を容易に押し返すことができると、彼は確信している。そればかりでなく、コンドラチェフ氏は独自の革新的な事務机や、棚、戸棚を、ヨーロッパにも販売できることを疑わない。

オフィス家具の生産に初めて投資をする時、コンドラチェフ氏は誤算することはなかった。「フェリックス」のオフィス家具は、熱いピロシキのように売り切れた。彼の最初のポドリスク工場は

24時間体制で稼動している。家具職人は一分と立ち止まらず、家具生産に従事する。オフィス家具の顧客数は、うなぎのぼりに増加した。コンドラチェフ氏の計算が、仮に家具セットの生産を3倍

に増加させることであっても、その生産量では、全ての購入希望者を満足させることには到らなかった。そこで、彼はさらにもう一つの工場を建設することを決定したのである。(塩谷昌史)



イリヤ・コンドラチェフ氏

モンゴルから チンギス・ハンの墓

この夏、チンギス・ハンの墓がつかいに発見されたというニュースが世界を駆けめぐった。チンギス・ハンの墓の探索は、日米共同の「ゴルヴァン・ゴル」プロジェクトで話題となったことが記憶に新しい。今回は、アメリカのシカゴ大学とモンゴルが共同で実施した「チンギス・ハーン・エクスペディション」がヘンティ県バトシレート郡のビンデル山付近で「ウグログチーン・ヘルム」と呼ばれる周囲3,200メートルに及ぶ壁に囲まれた一郭の中で60にのぼる墳墓が発見されたというものである。これが何らかの貴

族の墓群と考えられ、かつチンギスの生誕地やハン即位の地に近いとされることから、チンギスの埋葬地ではないかとの説が出された。しかしこれには早速、同国の考古学者から異論が出されている。モンゴル科学アカデミー歴史研究所のオチル教授によると、墓の真偽の調査のために5人の研究者が派遣されたが、その結果は、どうも時代としてはより古い契丹時代のものらしいとのことである。既に発掘計画があるようで、結論はその結果をまつことになる。(岡 洋樹)

中国から 北京の変貌

1990年代以降の市場経済化に伴い、中国の主要都市では大規模な都市再開発が進行している。その最大の要因は急速なモータリゼーションの進行であり、首都である北京も例外ではない。ただ北京の場合、特に旧市街中心部には故宫などの大規模史蹟や党・政府機関の中核、さらには四合院造りの歴史的街並みが存在し、都心部再開発への抵抗が強かった。しかし幹線道路での渋滞の慢性化、自動車や工場の排気および各戸での練炭使用などによる大気汚染、また伝統家屋の老朽化や水質汚濁など生活環境の悪化が深刻化した。一説では2000年五輪の誘致失敗はこうした事情も一因とされる。こうして、90年代半ばから北京市では再開発が大規模かつ加速的に展開した。これは北京の都市構造の改変に及ぶ徹底したものであり、まず旧市街を含む市域全体で環状・格子状道路の新設・拡張やガス管敷設などのインフラ建設が本格化した。

さらに地区ごとに機能を特化させた市街地整備が進められた。その結果故宫などの観光資源が集中する旧市街の南北中軸は歴史景観地区として保存・整備され、北西部はハイテク開発区、東部は国際的業務地区としての性格を強め、また王府井や西単は大規模商業地区として装いを新たにした。そして現在も2008年の開催が決定した北京五輪に向けて鉄道や高層住宅などの建設が間断なく進行している。灰色煉瓦の古風な街並みから高層ビルの乱立する現代都市へという北京の急速な変貌ぶりには驚くべきものがある。渋滞がやや緩和し、老朽化した工場の移転や設備更新が進んだことで、大気汚染もかなり改善したとされる。しかし他方で夏のヒートアイランド現象や水や電力の大量消費が深刻化している。こうした新たな都市問題に対処しつつ、生活環境の改善と調和させることが今後北京が発展してゆく上での課題であろう。(上野稔弘)

中央アジアから タシケントの朝鮮料理店

本年8月中旬、科研費による調査旅行で中央アジアのウズベキスタンを訪問する機会があり、その目的は高麗人と呼ばれる旧ソ連の朝鮮系住民の言語や精神文化の継承と変遷についての調査を行うことであった。首都タシケントでは高麗人文化センター協会の人々の協力を得て高麗人の多い地区にあるバザールや近郊の旧コルホーズを訪問し、聞き取り調査を行うことができた。

中央アジアの高麗人は19世紀半ばから日本植民地時代にかけて

主に朝鮮半島北東部の咸鏡道地方から豆満江を越えてロシア沿海州に流出した朝鮮人を先祖とする人々である。彼らは極東で主に稲作等の農業に従事し、革命後はコルホーズを組織し、また民族的長所である教育熱心さを発揮してたくさんの学校だけでなく大学までも作って民族語による教育を行っていた。しかし、1937年、「日本のスパイになる可能性がある」という理不尽な根拠による独裁者スターリンの命令でその全員が突然遠い中央アジアに



タシケントのククシ

移住させられるという悲劇を経験した。砂漠地帯へのこの突然の移住の後にも彼らはその勤勉さと得意の農業技術を活かしてあちこちで荒野を豊かな農地に変えた。現に、筆者らが今回訪問したタシケント近郊の高麗人コ

ルホーズ“Politotdel”は、一時はソ連で最も豊かなコルホーズであったとのことである。民族学校もすぐに再建して朝鮮語による教育を再開したが、しかし、その後党中央の指示によりロシア語による教育に切り替えられてしまった。

高麗人のうち、現在朝鮮語を日常語として使っているのはもはや限られた老人のみであり、大部分の人々の会話はロシア語である。姓は朝鮮のものを保存しているが本貫は覚えておらず、また朝鮮語の名を持つのは老人層に限られ、大部分の人々はロシア語の名前と父称を持っている。しかし、チェサ=祖先祭祀や、チュソク（秋夕）という旧暦8月15日の祭りなど朝鮮民族にとって重要な精神文化的行事は行われていることが今回の聞き取り調査で確認できた。

今回の旅行で強い印象を残したものの一つにウズベキスタンの朝鮮料理がある。タシケントとサマルカンドで高麗人文化センター協会の人々が私たちをいくつかの料理店に案内してくれたが、

それらは大きな通りから離れた、小さな看板しかない目立たない店で、観光客などは気づかずに終わってしまいそうな所であった。そうした店を出される料理とはキムチあり、チャプチュエ（雑菜）あり、ブルゴギ（焼き肉）あり、豆腐あり、テンジャンチゲ（味噌鍋）あり、テンジャングク（味噌汁）あり、ナムル（和え物）あり、もちろん白飯ありといった本格的なもので、韓国のもとの多少の違いはあるとはいえ、まぎれもなく朝鮮料理そのものであり、味も上々であった。そして、かの国の高麗人は家庭でもこうした料理を常食にしているのだということで、外食するときも好んで朝鮮料理を食べるようである。最初の先祖が朝鮮を出てから1世紀半、強制移住でウズベキスタンに来てからでも60年以上が経過しているのにも関わらず、故国の食文化をこれだけ正確に保存しているとはまさに驚きである。写真はククシと呼ばれる麺である。この語の起りは明らかにソウルの「ククス」に相当する咸鏡道方言であり、食べてみると冷麺に似た粉れもなく朝鮮の麺であった。しかし、その横に置いてあるのが箸ではなくフォークであることに注目されたい。これだけ朝鮮の食文化を保存しているにも関わらず、箸だけは使わず、フォークとスプーンを使って食べるのである。強制移住の時に箸までは持ってくるのができなかったからだと説明する高麗人もいたが、その真偽については疑問が残る。ともあれ、タシケントを訪れる機会があり、もし偶然小さな朝鮮料理屋を見つけたら是非入ってみたい。油っこいウズベク料理に疲れた胃腸を休ませることができる。（柳田賢二）

研 究 機 関 紹 介

●カラムイク国立大学人文科学研究所の紹介

カラムイク国立大学は、ロシア連邦の一部の、カラムイク共和国の首都エリスタにある。現在、われわれの大学は、多数の部局からなる。大学では、23の総合的な専門分野と、8の地域的な専門分野において、能力のある専門家を養成している。大学での教育は、相当な数の教職員により提供されている。スタッフには、41の講座で教える450人の教員を含んでいる。教員数の中には、34人の教授と202人の理系の修士、および助教授を含んでいる。22の専門分野に、50人以上の学部卒業生を養成する大学院の課程もある。

大学に在籍する学生の数は、約7000人である。その中には、4110人の昼間部の学生と、2747人の夜間部の学生を含んでいる。全体の研究空間は、4万4513平方メートルであり、学生一人当たりの平均的な研究空間は、10.15平方メートルである。大学の設備には、新情報技術センター、11のコンピューター室、100万冊の文献を有する科学図書館、285席ある閲覧室が4室ある（大学の図書館は全体として、8590人の閲覧者にサービスを提供している）。カラムイク国立大学の寄宿舎は、800人の学生を宿泊させている。大学には、75人収容可能な健康センター、630席の食堂が三つ、ピュッフエが三つ、そしてスポーツ施設がある。物理的および技術的基盤は、今や改善されつつある。印刷設備1セットが導入された。国内のコンピューター機材の総数が増えつつある。毎年、パソコンの新世代が導入される。言語学部と、カラムイク言語学・歴史学部は、リンガフォン室を獲得した。犯罪学研究所が設置されるようになり、大学の駐車場が新しくなった。

カラムイク国立大学は、日本、ドイツ、英国からの学生と講師向けに、フィールドワークと実習を提供している。

国際プログラムの参加については、われわれの大学は、中国、モンゴル、ベルギー、英国、フィンランドの大学や科学センターと協力関係にある。

人文科学研究所はカラムイク国立大学の一部局である。この研究所は、いくつかの専門分野、すなわち、言語学、歴史学、地域研究を統合する形で2001年4月に設立された。研究所内の経験豊かで、能力のある教員には、7人の教授、35人の助教授・助手がいる。言語部門には4講座がある。すなわち、ロシア語と一般言語学、ロシアと外国の文学、英語の言語学、外国語である。教員は、外国語としてロシア語を教授することに経験を積んでいるので、ロシア語の実習を提供することが可能である。

ロシア史と全体史の講座は、歴史や地域研究部門の学生を養成している。極東（モンゴル、中国）の歴史と言語の専門家を養成するための、地域研究講座を設立する可能性をわれわれは現在考えている。

人文科学研究所で教えている教授の何人かは、全国で知られている。このような教授には、V.I.ハルチュエニコフ、D.A.スセエヴァ、Z.I.マカロヴァ、N.Z.ビトゥケエフ、V.B.ウプシャエフ、T.S.エセノヴァ、A.N.コマンジャエフがいる。

ロシア語と外国語の言語学における専門家の、毎年学位獲得者は、200人を超える。

大学はまた宿泊施設を提供することができる。（カラムイク国立大学人文科学研究所長T.S.エセノヴァ）



カラムイク国立大学パンフレット

● 最近の共同研究会・講演会から ●

◆講演会：東アジアの科学技術

科学技術研究分野の主催により、日本学術振興会の招聘で来日中の任定成教授（北京大学科学と社会研究センター）の講演会を下記の如く開催した。

日時：7月24日（火）16:00－18:00

場所：東北アジア研究センター3階セミナー室

演題：任定成「中国における科学と社会の界面
— 1919－1949 —」

任教授は、今世紀前半の30年間の近代中国における「科学」の観念の推移を初めとして、科学の普及と推進を辿り、思想的、制度史的観点からその意義を論じられた。出席者は12名、質疑応答も活発で、その一部はピアホールでの歓迎会にまでもちこまれた。（吉田 忠）

◆シンポジウム「日本中世楽舞と東アジア」

平成13年8月22日、本センター主催、「望恨歌」韓国公演準備委員会共催、国際交流基金の後援により、シンポジウム「日本中世楽舞と東アジア」が国立能楽堂にて開催された。本シンポジウムは、中世以来の日本の伝統楽舞である能が朝鮮半島に素材を求めることによる新たな表現形態の可能性をテーマとしたものである。当日は山田勝芳センター長の開会挨拶に続き、まず韓国の伝統舞踊家金英淑氏による韓国民俗舞踊「サルブリの舞」と能観世流シテ方観世榮夫氏による能の舞「序之舞」「善知鳥かけり」の演技比較が行われ、続いて両者に囃子方および楽劇研究家横道萬里雄氏らを変え、本センターの成澤勝教授の司会でディスカッションが行われた。さらに、プレス取材等に応じつつ、来場者との討論も試みた。本シンポジウムを通じて、「能」には無い「恨（ハ）の舞」の定立に向けて舞型を大きく進化させるための足がかりと、両国の舞踊表現者の確固たる相互理解が得られると同時に、能と朝鮮の伝統民俗舞踊との類縁性も確認されるなど、大きな成果を収めた。（上野稔弘）

◆シンポジウム「新しいモンゴル研究の地平」

9月11日午後、シンポジウム「新しいモンゴル研究の地平」が開催された。これは、センター共同研究「北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究」の一環として企画されたもので、センターに滞在中のロシア・中国・モンゴル国の研究者と、モンゴルを対象とした研究に従事する本学の文系・理系の研究者が参加し、報告・討論を行った。カルムイクからは、センター客員教授タマーラ・エセノワ教授（言語学）、ブリヤートからはダリー

マ・ボロノエウァ研究員（人類学）、内モンゴルからはフレルバートル研究員（言語学）、モンゴルからはライハンスレン・アルタンザヤ研究員（歴史学）が参加、センターからは栗林均教授（言語学）、横山隆三客員教授（岩手大学工学部・情報工学、千葉史氏と共同発表）、工藤純一教授（環境情報学）、岡洋樹助教授（歴史学）、鹿琪氏（工学研究科・地下電磁波計測工学）・海老原聡助手（地下電磁波計測工学・佐藤源之教授・電磁波応用工学と共同発表）が報告を行った外、学内からセレーネン・ジャルガラン氏（理学研究科・地質学）、ナチンションホル氏（理学研究科、広瀬忠樹教授と共同発表・植物学）が報告した。シンポジウムでは、学外からの参加者も含めて、それぞれの専門分野に関わる問題のほかに、学際的なモンゴル研究の在り方についても活発な討議が行われた。



（岡 洋樹）

◆「東北アジアにおける民族移動と文化の変遷：テュルク班」第4回研究会

去る9月22日午後、「東北アジアにおける民族移動と文化の変遷テュルク班」第4回研究会が、東北アジア研究センター4階会議室で行われた。研究発表は、東京都立大学大学院博士課程の澤井充生氏による「中国イスラームの復興——寧夏回族自治区銀川市における回族の清真寺管理運営制度と宗教政策」と、北海道大学スラブ研究センターの宇山智彦氏による「カザフ人の民族意識・領域意識形成における帝政ロシア文化政策の役割——『ステップ地方新聞』（1888-1902年）を中心に」であった。社会人類学の澤井氏は、中国回族自治区において指摘されている近年のイスラーム復興現象を、現地調査でえられた地方行政の宗教政策のあり方と民衆の信仰実践という観点から検討した。歴史学の宇山氏は、20世紀初頭のカザフスタン知識人の民族意識形成に重要な役割を果たしたと評価されながら本格的な研究がすすんでいない「ステップ地方新聞」の史料分析を行い、帝政ロシア植民地体制と民族知識人の関係を再考する上での問題提起をおこなった。参加者は13名で、研究班メンバー以外に東京や九州からも参加があった。（高倉浩樹）

センター動向

■寄附研究部門

本年1月1日より次の寄附研究部門が設置されました。

【環境技術移転（NKK）寄附研究部門】

- 渡邊 之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術（本年1月着任）
- 魁叶（スエー）助手：環境政策（本年4月着任）

■現在の客員研究者

本年8月～10月の東北アジア研究センターの客員教授をご紹介します。

<客員教授>

【国内から】

- 和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 横山隆三（ヨコヤマ、リュウゾウ）教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

- ESENOVA, Tamara（エセノワ、タマーラ）教授：ロシア、カルムイク語教科書入門編の出版計画
- EPOV, Mikhail（エポフ、ミカエル）教授：ロシア、電磁気学的環境計測に関する研究
- 恩和巴因（エンフバト）教授：中国、ダグル語の口語および文献資料の言語学的研究

<客員研究員>

- 呼日勒巴特爾（フレルバートル）研究員：中国、日本学術振興会外国人特別研究員、モンゴル語音韻史の研究
- BORONOEVA, Darima Tsybikovna（ボロノエウァ、ダリーマ、ツイビコヴィナ）研究員：ロシア、国立ブリヤート大学文化学部主任教官、日本におけるモンゴル系民族コミュニティに関する研究
- LITASOV, Konstantin D.（リタソフ、コンスタンチンD.）研究員：ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部・地質学地球物理学鉱物学総合研究所研究員、マントル組成と水系の高温高圧下での実験
- POPOVA, Lioudmila（ポポバ、リュウドミラ）研究員：ロシア、サンクトペテルスブルグ大学経済学部講師、北東アジア地域の経済協力について

（北風 風）

日本館 便り

nihonkan・dayori

実りの秋

ロシア語では秋についてしばしば「黄金の秋」という形容が用いられます。これを書いている9月下旬、私の住居のまわりではもう街路樹の葉がすっかり黄色くなりましたが、「黄金の秋」という言葉には紅葉が美しいという意味の他に「実りの秋」という意味も込められているのかもしれない。

アカデムゴロドクのスーパーの前の路上では、夏から秋にかけて毎日たくさんの人々が木箱の上に野菜を置いて売っています。この人々は農民ではなくてアカデムゴロドクの住人で、郊外のダーチャ（別荘）の家庭菜園で取れたものを売って収入の足しにしているのです。今年の夏は私が着任した頃まで雨が多くて気温が低く、野菜がよく育たなかったので収穫が少なくこの人々は困ったようです。しかし、それでも実にいろいろな野菜を売っています。一人一人が持ってくる量はごく少ないのですが、ある人はジャガイモ、ある人はニンジン、ある人はピーマンとタマネギといった具合なのです。ほかにトウモロコシもキュウリもナスもトマトもキャベツもあります。また、キクなどの花束を両手に一つずつ持って行き交う人々に声をかけ、誰かが買うまでずっと立っているお婆さんもよく見かけます。

秋口になるとこれに木の実とロシア人が大好きなキノコが加わります。私はキノコに詳しくないので名前はまだよく分かりませんが、ロシアは森の国ですのでキノコはたくさんあり、売っている値段も1キロで20～30ルーブル（80～120円）程度ととても安いのです。また、バケツ1杯

単位で売っている種類もあります。よほどたくさん取れるのでしょうか。傑作なのは大きなキノコで、傘の直径が20センチもあるような巨大なキノコをたった1本だけ持って無言でずっと立っている男性を見たことがあります。きっとよほど珍しいもので、良い値で買ってくれる人がいるのでしょうか。一度傘の直径が7～8センチほどの茶色いキノコを500グラムだけ買い、油で炒めて食べてみたことがありますが、日本では経験したことのない味でとても美味しいものでした。

スーパーでもその隣の八百屋でも野菜は売っていますが、品質は明らかに路上で売っているダーチャの野菜のほうが良いようです。また、キノコはなぜかスーパーや八百屋では売っていません。この近くにはいくらでも森があり、流通経路に乗せるまでもなく誰でも自分で採って食べられるからなのかもしれません。

ここに赴任してきてから2ヶ月が経ち、路上で売っている野菜の種類も大分変わってきました。当初多かったキュウリは小粒になって数も少なくなり、キノコももう盛りを過ぎたようです。私の駐在期間は間もなく終わりますが、もうすぐ早い冬が訪れてダーチャの菜園にも雪が積もり、路上の野菜売りも来年まで閉店になるのでしょうか。

(柳田賢二)



路上で売っているキノコ



スーパーの前の野菜売り

センター最近の

出版物

山田勝芳編『東北アジアにおける交易拠点の比較研究』東北アジア研究センター叢書第1号、2001年。

本書は、平成9年度～平成10年度に実施された科研費補助金（国際学術研究）による同名のプロジェクトの成果として刊行されたものである。内容は、研究代表者山田勝芳による「序説」のほか、岡 洋樹「乾隆期中葉ハルハ・モンゴルにおける漢人旅蒙商の商業活動」、佐々木亨「オロチョンの毛皮獣猟と北満洲における毛皮取引」、丸山宏「福建深滬宝泉庵における対外宗教文化交流」、成澤勝「朝鮮側拠点「東菜」を通じた日本観・日本人観の形成」、柳田賢二「ロシア高麗人の源流」、塩谷昌史「19世紀前半のニジニ・ノヴゴロド定期市における綿織物取引」、堀江典生「西シベリアの開発拠点と地域主義」、瀬川昌久「香港新界の地場交易拠点・「墟市」と英国統治以前の地域社会構造」、山田勝芳「広州と香港——歴史と信仰から見た交易拠点としての相互関係——」の9篇の論文から構成されている。いずれも東北アジア地域の結びつきを、商業ネットワークや交易拠点における人の流れや物の動きの具体的な検証を通じて明らかにした研究である。（岡 洋樹）

International Workshop on Global Change: View of Siberian from NOAA Satellite. Edited by Jun-ichi Kudoh and Katsuyoshi Yamada, Northeast Asian Study Series 5, 2001.

本書は、東北アジア研究センターが創設以来ロシア科学アカデミー・シベリア支部との間で進めてきたVSATシステムとNOAAシステムによる衛星画像データに関する研究の一環として2000年8月22日開催されたワークショップInternational Workshop on Global Change: View of Siberian from NOAA Satelliteのプロシーディングとして刊行されたものである。内容は以下の通り。Opening Remark (Masanori Tokuda), Siberian Studies (V. I. Molodin), Computer Education of Novosibirsk State University (N. S. Dikansky), Tohoku-Siberia Computer Link: Present State of Prospective. (F. A. Kuznetsov), International Arctic Research Center (Syun-ichi Akasofu), Comparison of NOAA and DMSP Views of Siberia. (Christopher D. Elvidge), Global Remote Sensing of Vegetation from Space by the NASA/GSFC GIMMS Group. (R.L.Mahoney, C.J.Tucker, A. Anyamba, M. Cisse, D. Slayback, S. Los, J. Pinzon, J. Kendall, E. Pak, Z. Bronder, D. Grant, M. Parris, A. Morahan), Componential Spectral Characteristics of Larch and Pine Communications in Eastern Siberia for Interpretation of NOAA/AVHRR. (K.

Kushida, G. Takao, M. Fukuda, T.C. Maximov, A.V. Kononov), Estimation of Forest Recovery after Disturbance (Gen Takao), Plant Geographical Aspects of Vegetation as Revealed by Vegetation Index in Siberia. (R. Suzuki, S. Tanaka, T. Nomaki, T. Yasunari), NOAA Image Analysis by Using Four Dimensional Histogram (N. Ozawa, J. Kudoh, Y. Nemoto), Temporal Analysis of Forest Fire in the Far East Region of Russia by Using NOAA AVHRR Images. (K. Kawano, J. Kudoh), Automatic Cloud Detection from Satellite Images Based on Completely Clear Pixels Detection. (W.H. Lee, J. Kudoh), Accuracy of Estimated Sea Surface Temperature Based on NOAA/AVHRR Data. (S. Tanba, R. Yokoyama), Japanese-Russian Project "Distributed Remote sensing System of Northeast Asia" (G. N. Erokhin, F. Kuznetsov, D. Nikulin, J. Kudoh, M. Tokuda), View of Siberia from NOAA by using VSAT System. (J. Kudoh, K. Yamada, M. Tokuda, L. Tcherniavski, A. Kuznetsov) (岡 洋樹)

平川新編『シンポジウム 変動するアジアと地域研究の課題 (東北アジア研究シリーズ①)』東北大学東北アジア研究センター、2001年。

本書は、アジアの地域経済・国際協力・環境問題を主なテーマとして東北大学東北アジア研究センター（以下、東北ア研）と日本貿易振興会アジア経済研究所との共催によって行われた同名のシンポジウム（2000年10月14日）の報告集である。編者による序文の後、大西康雄（アジア経済研究所）は「中国の物流と地域経済圏」という報告の中で、ミクロとマクロの中間的視点からの経済分析を通して中国の地域経済圏の形成を扱った。つづく山口博一（山口大学）の「地域研究と国際協力のあり方」においては、今後の日本のODAに必要とされる貧困問題・民主化・軍縮・緊張緩和といった課題にとって、地域研究者からの提言が不可欠であると述べられている。さらに明日香寿川（東北ア研）は、近年の中国の急激な経済開発と地球温暖化への影響を論じながら、「東アジア酸性雨モニタリングネットワーク」に代表されるような環境保全と国際協力の新たなあり方を構築する必要性を論じている。明日香の論考は、社会科学と環境科学の学際的研究の取り組みを示すものであるが、人文科学と地球物理学の対話の可能性は、本書最後の成沢勝（東北ア研）による「10世紀の白頭山噴火と文理融合型研究の試み」において論じられている。東北ア研の刊行物「東北アジア研究シリーズ」1号として発行された本書は、政治経済的に変動するアジア地域を理解するために必要とされる現状認識と新たな方法論の確立を目指したものと見えるだろう。(高倉浩樹)

ニコライ・レザーノフ編著、日本版、田中継根 編訳、『露日辞書・露日会話帳』、東北アジア研究センター叢書、第2号、2001年3月。

東北大学東北アジア研究センター

前書き…………… 1
 解説…………… 2
 露日辞書（『ロシア語アルファベットによる日本語辞書』）… 7
 辞書原注…………… 127
 露日会話帳（『日本語学習の手引き』より）…………… 129

本書はニコライ・レザーノフの露日辞書および露日会話帳の日本版である。レザーノフは日本への航海中に、「ナジェージュダ号」の中で『ロシア語アルファベットによる日

本語辞典』（1804年）および『日本語学習の手引き』（1803年）を書いた。それらは手書きの原稿のままでロシアに保管されていたが、1994年大島幹夫氏らの努力によりマイクロフィルム化された。そのフィルムを基に田中継根教授により再編集されたのが本書である。(塩谷昌史)

成澤 勝編『環中華の儀礼と芸能—朝鮮を軸に一』東北アジア研究センター叢書第3号、2001年。

本書は平成9～11年度共同研究「東アジアの儀礼と芸能における身体と社会の表象」の報告書として刊行されたものである。内容は成澤勝「環中華文明としての朝鮮」、成澤勝「上代日中朝交流の足跡から見た芸能—‘伎楽’故地をめぐって—」、徐淵昊「高句麗に見る人形戯の成立—環中華的儀礼の一典型と芸能—」、二階堂義弘「地藏菩薩新羅王子説について」、成澤・徐「『資料』簡注「呉晴『鳳山タール』（鳳山仮面戯台本）」」、丸山宏「中国西南少数民族の宗教儀礼における死者と冥界の表象—道教との比較の視点から—」、浅野春一「台湾南部の醮儀に見られる血と肉の性格について—道教儀礼における供物と身体の表象—」の論文6編および資料解題1編により構成される。中華周辺や中華内部には「中華」との関わり合いは持ちつつも別ベクトルの文化主体としてのカウンターカルチャーが形成されているとの視点に立ち、こうした「環中華」における儀礼・芸能に焦点ををぼり、まず朝鮮を一つの典型として歴史的な視角も交えて検証を試みているほか、中国西南部の少数民族や台湾についても検討を加え、儀礼・芸能の環中華的動態に迫っている。また、本書ではフィールドワークの中で撮影された儀礼・芸能活動の写真資料が多数収録されている上、その一部はカラーで掲載されているなど、民俗誌資料としての価値も高い。(上野稔弘)

成澤 勝編『公開シンポジウム 21世紀東北アジアの安定と繁栄に果たす日韓の役割』東北アジア研究シリーズ②、2001年。

2000年11月にセンター主催で開催された駐日本国大韓民国特命全権大使チェサンヨン（崔相龍）氏の講演とシンポジウムの記録である。シンポジウムには、和田春樹東京大学名誉教授、チョンコーポレーション代表全民済氏、河北新報編集局長兼報道部長岡崎智政氏、経団連国際協力本部北東アジア、ロシア担当の太田誠氏、NHK解説委員毛利和雄氏がパネリストとして参加した。本書には、チェ大使による講演とシンポジウムでの討論全てが収録されている。チェ大使の講演は、政治学を専門とする立場から、日韓関係の現状と将来に対する有益な示唆に富むものとなっている。(岡 洋樹)



雑感とお願い

懇話会理事長 山田 勝芳

◇本センターと懇話会会員の皆様とを結ぶ役目の理事長として、現今の大学をめぐる問題について若干記させていただきます。

9月27日に文部科学省の『新しい「国立大学法人」像について（中間報告）』（これは文科省のホームページで閲覧可能です）が公表され、「大学法人化」について今後シビアな議論の展開が予想されます。大学内でも一層真剣な検討を進めざるをえません。

そこで、会員の皆様にもお考えいただくために最近聞く機会を得ましたお二人のご講演の一部を引用させていただきます。お二人とは、元文部大臣（参議院議員）の有馬朗人先生と、懇話会会長であります岩手県立大学長の西澤潤一先生です。

有馬先生は、①我が国の大学などへの支出額は欧米の半分程度に過ぎないこと、②大学生の「学力低下」については、18歳人口の激減にも関わらず、（国立大学はやや減少したが）公立・私立を中心にかなり定員が増加したことから起こるべくして起こった側面があると述べておられました。我が国の大学は100年以上の伝統があり、戦後の新制大学以降でも50年を経過しております。「制度疲労」や意思決定の問題など「時代の変革に遅れた」側面が確かにあり、そのようなご批判は甘んじて受けざるを得ません。しかし、一定の継続的教育研究の遂行によって始めて成果が生まれることが多い大学では、ことはそれほど簡単ではありません。制度改革には慎重な検討やその定着には長い時間が必要な場合もあることをご理解



いただきたいと思えます。

また、「説明責任」「透明性」「社会還元」などのキーワードが大学でも必要となつていますが、「法人化」されると一層重要になると思われます。

たとえば「入試」などでは、問題の「公開」が主流となっています。これに対して西澤先生は、アメリカの大学では多様な人材を選抜するために高度に練り上げられた問題を作っていて、それを大学の最も重要な資産として公開していない所があるとされ、多面的検討の必要性を示唆されました。これも考えるべき事柄です。

かつて各大学の入試センター試験科目削減が政治家・世論の大合唱で進められましたが、それが高校段階での基礎知識の欠如を生み、大学教育をも変質させたという反省に立って現在再び科目増へと転じつつあることを考えれば、「入試」の難しさについてよくお分かりいただけると思えます。

お二人の示唆するところの多いご講演のように、今や国民的スケールで「大学」を考えるべき時です。会員の皆様におかれましても、ぜひ我が国の教育研究の要にある「大学」についてお考え下さい。

◇最後をお願いを一ついたします。

シベリア・ノボシビルスクにあるロシア科学アカデミー・シベリア支部の考古学民族学研究所には「アルタイの美女」と呼びうるミイラ（左は同研究所の復元像）など、日本人の北方からのルーツに関わるような貴重な発掘品を多数所蔵しています。それを我が国で展示したいというご希望をおもちです。

ただ、クリアすべき問題が多々あり、今後の方途を見出しておりません。このことについて、会員各位の中で何かご経験などがおありになる方がおられれば、ぜひ山田までご助言をお願い申し上げます。

EDITOR'S NOTE

編集
後記

西澤会長のエジソンメダル受章（H12.6）、大道寺副会長のロシア連邦名誉領事任命（H13.1）に続き、このたびは徳田前理事長が国際協力事業団より国際協力功労者として表彰される慶事がありました。心からお祝い申し上げます。

昨今ますます異文化間の相互理解が重要になって来ておりますが、その様な観点からもぜひ「アルタイの美女」の日本展示実現を期待したいものです。
（出張中の成澤編集長代 岩山健三）

《うしろ》（東北アジア学術交流懇話会ニュースレター）第11号 2001年10月31日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア学術交流懇話会ニュースレター編集委員会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター気付

PHONE 022-217-7580 FAX 022-217-6010

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail :iwayama@cneas.tohoku.ac.jp